

フランス語のホームページ閲覧をとりいれた授業

井上 美穂

1. 本論の目的

語学教育は、理論と実践という2つの側面を持っている。応用言語学等の理論を扱う学者が実践の場としての授業のために研究する一方、実践の場で働く教員は授業の質の向上のために理論を参照して現場に応用する。この論文は、後者の立場に立っている。すなわち、フランス語のホームページ閲覧をとりいれた授業の実践に、応用言語学やペダゴジーの理論がどのように生かされているかを分析する。そして語学教育の理論の補強を行うと同時に、授業の質のいっそうの向上を目指すことが、本論文の目的である。

具体的には、まず第2章で以下の理論を紹介し、第3章でそれらの理論がホームページ閲覧授業のどこに生かされているのかを検討する。

- ・スキーマ理論
- ・prereading activity
- ・形式スキーマと内容スキーマ
- ・document authentique
- ・批判的リーディング

第4章では、時間が経るにつれて学習者の閲覧が上達していく過程を、実際のデータをグラフで表示しながら解説する。

2. 授業で実践されている諸理論

2.1 スキーマ理論

スキーマとは、「目の前にある事象を理解する時に利用する認知的知識構造、または、その枠組みのこと（白畑・他、2002, p.266）」である。この理論では、「人間が物事を記憶する過程は、入力された情報を単にそのまま写しとって保存するというものではなく、それまでの経験をもとに築かれたスキーマを心理的な枠組みとして、その中に新しい情報を取り込み、すでにあったスキーマを再構成する過程である（白畑・他、2002, p.266）」ととらえている。具体例をあげると、例えばこれから学習者がTGVに関する文章を読

もうとしている場合、頭が真っ白な状態で文章を読み、そこに書いてある情報をそのままそっくり受け入れるのではないということである。学習者は、まず「TGVはフランスの高速鉄道で新幹線と同じく世界最速の300キロで走る」等の自分が既に持っている背景知識をまず思い浮かべ、それを枠組みとして文章内の新しい情報を受け入れる。そして「2007年には新たに東線が開通して320キロで走行する予定である」という新しい情報を受け入れ、「そうなると日本の新幹線は世界最速ではなくなってしまう」という自分の感想をも付け加えた上で、自分の頭の中のスキーマを再構成するのである。

「外国語教育学では、文章を読んだり聞いたりする活動の前に、スキーマを学習者に与えると、どのような効果があるかという研究が多い（白畑・他、2002, p.267）。」そして、「スキーマを与えた時の方が、内容理解がより正確になることが報告されている（白畑・他、2002, p.267）。」つまり、読解やききとりなどの学習を始める前に、いかに学習者のスキーマを活性化させ、上手に背景知識を与えておくかが学習の成功のポイントとなるわけである。

2.2 prereading activity

こうして、「スキーマ理論に関連して、読みを始める前の活動（prereading activities）についての研究も盛んに行われるようになった（小池・他、1997, p.270）。」そして、文章を読み始める前のprereading activityとして、絵を与えたり、単語を前もって教えたり、テキストの内容を予測したりすることなどが提案されている。

ホームページ閲覧の授業でも、読解やききとりなどと同じく、事前に学習者のスキーマを活性化させておくことが必要となる。例えばスーパーのLeclercのホームページを閲覧する場合、Leclercという名前を全く知らない学習者がほとんどである。しかも今日の授業でそれを閲覧する理由が、生分解しないレジ袋が禁止になる法案が最近フランスで通過し、Leclercはレジ袋廃止の先駆者であるという事情に至っては、知識は皆無であるという前提で授業に臨まなければならない。これらの背景知識を学習者に与えてこそ、Leclercのホームページの閲覧の教育効果が上がるのである。

どのような形でこの背景知識を学習者に与えるかについては、多種多様な形式が可能であるが、次の2つの理由によって、筆者は「パソコンで自動添削できるクイズ」という形式をとっている。

理由1：このactivitéは授業の冒頭に行うものであり、ゲーム性を加えれば、学習者が楽な気持ちで学習を開始できる。

理由2：CALL教室を使う授業でなので、その便利な機能を最大限に生かしたい。クイズについては、第4章で詳しく述べることにする。

2.3 形式スキーマと内容スキーマ

2.1章と2.2章でスキーマについて述べたが、実はスキーマには2つの種類がある。

形式スキーマ (formal schemata) は、文章の構成や書き方の習慣に関する知識であり、内容スキーマ (content schemata) は、テキストには出ていない場合も含めてその文の内容に関する世間的な知識である (シルバスタイン、1997, p.10)。

つまり、2.2章でとりあげた知識「Leclercはスーパーである。フランスでレジ袋廃止の法案が通ったが、その先駆者はLeclercである。」は、Leclercに関する内容スキーマということになる。一方、Leclercのホームページに関する形式スキーマとしては、次のような項目があげられる。

- a. 多くのホームページにはサイトマップがあり、これを使って情報のあるページにすぐに飛べるようになっている。サイトマップはフランス語でplan du siteと呼ばれ、画面の上部右側または下部にある場合が多い。
- b. 多くのホームページにはproduitsというページが設けてあり、ここを見ると商品について調べることができる。

内容スキーマについては、授業冒頭にクイズ形式で与えることをすでに2.2章で述べた。もう一方の形式スキーマについては、次のように対処している。学習者がホームページの閲覧学習を終わった後、全員にそのホームページを見せながら、上記a bのような知識を教員が解説する。その際には、Leclercのホームページの特徴を述べるのではなく、他のホームページを見るときにも役立つような共通点を強調する。そして、この形式スキーマに関する知識は、次回以降の授業でのホームページ閲覧に役立ててもらおう。

2.4 document authentique

Document authentiqueは、Communicative Language Teachingでよく使われる教材のひとつとして注目されており、「時刻表、道路標識、雑誌、新聞などのいわゆる実物教材 (田崎・他、1995, p.255)」である。「CLTでは日常の言語使用を反映させる立場からこのようなauthentic materialの使用を強調してきた (田崎・他、1995, p.255)。」このdocument authentiqueの利点としてシルバスタイン (1997, p.125) は、「新聞、雑誌、ラジオ、テレビなどからとった教材は、教師が思う以上に学習者の興味をひくことが多い」点をあげている。しかし、「使用にあたっては、学習者の程度に応じてなんらかの簡素

化が必要な場合がある」とも述べている。

インターネット上のホームページは、一種のdocument authentiqueであり、新聞や雑誌などと同じく、これを教材として使うことの意義は大きい。しかしシルバスタインが上でも述べているように、学習者のレベルに応じてなんらかの対処が必要である。特にインターネット上の情報は膨大である上に、お互いが常につながった状態にあり、新聞雑誌などと違って1箇所だけを切り取って学習者に提示することは難しい。またあるページだけを印刷して学習者に配布すると、その時点でその教材はホームページとしての特性を失ってしまう。そこで、授業ではただ閲覧するのではなく、ある情報をホームページの中から探し出すような問題形式を採用している。詳しくは、第4章で述べる。

2.5 批判的リーディング

critical reading「批判的リーディングとは、文面にあることを表面的に理解するだけでなく、それを超えてテキストが言おうとすることを類推し評価することである。読み手はリーディングによって与えられたアイデアが自分が持っている考えにどのように当てはまるかを判断しなければならない（シルバスタイン、1997, p.41）。」このような態度で読解に臨むことは、以前の授業では明らかにはされていなかった。「これまでのリーディングでは、テキストがすべてであった。そのテキストに内在する哲学的前提やその背景にある著者の見解まで見極めて、テキストそのものを批判的に検討するなどということは、おそらくなかったであろう（シルバスタイン、1997, p. 91）。」

テキストが言おうとすることを学習者が評価するという作業は、かなり上級レベルの語学授業でしか行えないと考える人がいるかもしれない。確かに書かれた文章を教材として使う場合には、その文章がある程度の内容を持っている必要があり、「挨拶」や「道順」を学習するための文章で批判的リーディングを実現するにはかなりの工夫が要求されるだろう。しかしホームページに載っている情報のうち、図表・地図・写真・動画に対し、学習者が評価を下すことは意外に簡単である。

例えばモナコ政府の公式ホームページには、モナコの住民に関する相続税を示した表が載っている。こどもや兄弟など、親等の近い順にそれぞれに課される相続税率をパーセンテージで表したもので、辞書さえあれば、初級でも十分に理解できる。この表を教材として使った授業では、学生はただパーセンテージを見つけて答を解答欄に記入するのではなく、その税率の低さに驚き、各人各様の判断を自然に表明するのである。このように、批判的リーディングを促すような教材がインターネットには数多く存在する。

ひとこと注意しておく、批判的リーディングは必ずしも「批判する」ことだけを指してはいないと思われる。教材の内容に対して「賛同する」場合も、それを受動的に

受け入れたのではなく、自分で判断して積極的に賛同したのであれば、批判的リーディングを行ったと考えられる。例えばモナコの場合だと、「日本の相続税は高い。モナコという素晴らしい国に、私も移住したい。」と考えた学習者も、「モナコは世界中のお金持ちだけを集める国で、その手法には賛成できない。」と考えた学習者も、両者とも批判的リーディングを行ったと解釈できる。

さて、批判的リーディングを学習者に促す場合、自分の意見を表明させる必要がある。「批判的な態度で読んでください」と教員が言っただけでは、なかなかそのような態度は学習者の身につかない。ここで問題となってくるのが、日本人学生の特性である。日本人学生は、なかなか他人の前で自分の意見を表明しようとしなない。そこで筆者の授業では、他人の前で意見を表明させる方法ではなく、教員と学生個人との間でエクセル文書をやりとりし、そこに自分の意見を書いてもらうようにしている。詳しくは第4章で述べる。

3 授業手順

3.1 クイズ

2.1章と2.2章で述べたように、学習者の内容スキーマを活性化させるために、まずクイズを行う。学生は、自分がその時点で持っている知識だけをもとにクイズに臨む。以下は2005年度前期の授業で使ったTGVに関するクイズである。パソコンの画面上に（ ）が空白の回答欄となった状態で表示され、学習者は答を書き込んだ後に採点ボタンをクリックする。すると、各回答に関して○×が表示される。最後に「答を表示する」という箇所チェックをつけると正解が表示され、これを見て学習者は自分の知識の穴をうめることができる。下の例では（ ）内が正解である。

TGVに関するクイズ

今日のテーマは高速鉄道です。日本の新幹線は、世界で最速の(300) km/hで営業しています。フランスの(TGV)も同じく(300) km/hで営業しています。このたび、JR(東)日本は26日未明に、世界最速の(360) km/hでの営業運転を目指す新幹線試験車両「(ファステック)」の試験運転を、(東北)新幹線の仙台―北上間で行い、成功しました。

この高速鉄道の技術を持つ日本・フランス・(ドイツ)の3国は、世界で高速鉄道建設の入札があるたびに、競争を繰り返しています。まず95年の韓国では(フランス) [国名]が、99年の台湾では大逆転で(日本)が落札しました。現在注目されているのは、2008年の(オリンピック)に合わせて(北京)と(上海)を結ぶ計画

をたてている中国です。ただし中国は、高速鉄道の国産化を目指しているので、技術の流出を危惧する声もあります。フランスも頑張っています。2007年にはストラスブルグとパリが高速鉄道で結ばれることになり、工事が開始されました。

このクイズによってTGVに関する背景知識を仕入れた学習者は、いよいよホームページ閲覧学習へと進む。

3.2目的のサイトを見つける練習

まず、学習者は目的のサイトを見つけなければならない。授業では、ホームページのアドレスをわざと教えずに、検索を使って自力でサイトを見つける練習を行っている。その際、フランスのGoogleを使って目的のサイトを探すように勧めている。フランス語で書かれたホームページを見つけるのには、これが一番速いようである。ただし、TGVの場合であれば一番上に検索で引っかかってくるが、他のサイトの場合は必ずしもそうではなく、検索結果のリストの先の方まで見なければならぬ場合がある。授業では、原因に応じて次のように指導している。

例えばキーワードにMonacoと入れると、検索結果の上の方にはモナコの観光に関するサイトが出てきてしまう。モナコ政府の公式ホームページを探すには、Monacoの他にgouvernementをキーワードとして入れると良い。このようにフランス語で適切な複数のキーワードを考えるように指導する。

キーワードによっては、英語とフランス語が同じ綴りを使っている場合があり、そのような時は英語のサイトが上位に来ることが多い。このような場合は、Pages francophonesにチェックをつけるように指導する。

こうして無事目的のサイトに到達した学習者は、今度はそのサイト内のどのページに目的の情報があるのかを探すことになる。

3.3目的のページを見つける練習

以下はTGVのホームページに関する問題の抜粋である。以下では（ ）内に正解が表示されているが、授業時のパソコンの画面ではそこが空白になっていて、学習者はそこをうめる情報をサイト内から自分で探してこなければならない。3.1章のクイズと同じソフトを使用しており、採点ボタンで○×表示させ、正解を見ることができるので、学習者は自分のペースで学習を進められる。

TGV鉄道網の地図へ行ってください。最初に建設されたのは、19(81)年から

(83) 年に作られたParisとLyonを結ぶ線[フランス語名TGV(SUD-EST)]でした。最も新しい線は、(2001)年に作られたTGV(MÉDITERRANÉE)線で、Marseilleまで伸びています。

この問題の解答となる情報を得るためには、サイト内でPlan du site → A propos de TGV → Carte du réseauの順にたどっていく必要がある。Plan du site, A propos de..., Carte de.. は、どれもホームページでよく使われる用語である。また Plan du siteへは多くのホームページにおいて画面の上方右側か下方にリンクが貼ってある。以上の知識は2.3章で指摘したように、ホームページに関する形式スキーマで、学習者に与えておくべき知識である。授業では、学習者が試行錯誤で自分で情報を見つける時間を設けた後に、教師がこれらの知識を解説し、次回の授業時の閲覧に備えてもらう。

3.4 目的の情報をページ内で見つける練習

TGVのCarte du réseauを使うような問題では、地図を見れば一目瞭然で目的の情報を得ることができる。しかしホームページには、本などと同じように書かれた文章が長く続いている場合もある。このような場合は、その文章のどこに目的の情報があるのかを探さなければならない。例えばトーゴ国営観光局のホームページを使った授業で、以下のような問題があった。

ヨーロッパ人がやってきたのは(15)世紀で、彼らの目的は(奴隷)の貿易でした。まず(ポルトガル)人が、次いで(デンマーク)人、(ドイツ)人、(フランス)人、(イギリス)人がやってきました。

この問題の答を見つけるためには、トーゴ国営観光局のサイトのHistoireのページを見る必要がある。しかしこのページはかなり長い文章からできており、その中から人間の目で目的部分を見つけるのは時間がかかる。そこで授業では、「このページの検索」という機能を使う練習を行っている。上記の問題の場合は、「ヨーロッパ人」「世紀」のどちらかを選んでフランス語に直し、「このページの検索」機能でその単語を探せばよい。その単語が最初に見つかった箇所、その周囲を読み、目的の情報を探す。そこがない場合は、次にその単語が見つかる場所へ移動し、またその周囲を読んで目的の情報をさがせばよい。

「このページの検索」機能に単語を入力する際、学習者にはGoogle等のネット上の英仏辞書を使うように勧めている。「ヨーロッパ人」「世紀」であれば、そのどちらかひと

つは学習者が英単語を知っており、英仏辞書でフランス語に直すことができるからである²⁾。また、もうひとつのテクニックとして、フランス語の単語がわからなかった場合は英単語の先頭部分を試してみるということも教えている。例えばフランス語の Européen という単語がわからない場合は、英語の European の先頭の Europ だけを使って検索しても大丈夫なのである。単語の先頭部分だけを利用する方法は、Européen という単語に含まれるアクセント記号つき文字を入力できない場合にも有効で、その際も Europ とだけ入力すればよい。

3.4 教員による解説

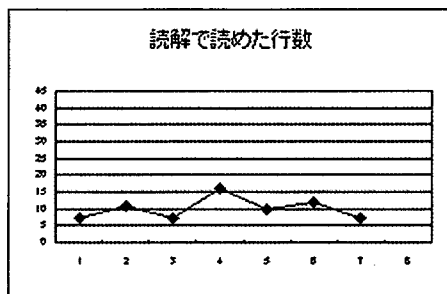
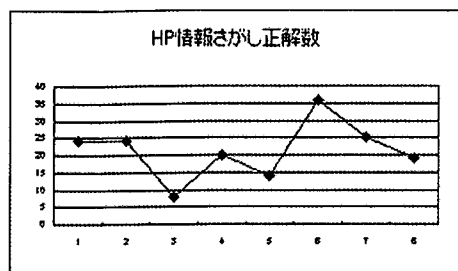
クラスによって多少異なるが、学習者は大体30分程度を使って、自分のペースで問題の答を見つける学習を行う。その後、その日の教材のホームページについて、教員が解説を行う。教卓のパソコン画面を学生卓のモニターに映し、教員のカーソルを動かしながら、そのホームページの構成や、そこで使われている用語に説明を加える。解説の際の注意点としては、2.3章で述べたように、そのホームページの特異性ではなく、他のホームページの閲覧においても利用できるような知識を提供するように心がける。

3.5 エクセル文書への記録

最後に、学習者は自分の学習記録をエクセル文書に記入する。エクセル文書には、各学習者の名前ががつけてあり、自分専用の記録となる。以下がその見本である。

日付	クイズ正解数	HP 情報さがし正解数	読解で読めた行数	今日のテーマについてご感想をどうぞ	教員からの返事
05.10.05	4	24	7		
05.10.12	2	24	11		
05.10.19	2	8	7		
05.10.26	2	20	16		
05.11.09		14	10		
05.11.16	5	36	12		
05.11.30	1	25	7		
05.12.7	3	19			

図表1：エクセル文書見本



見本には、ある学生の2005年10月26日～12月7日までの学習記録が載っている。クイズの正解数、HP（ホームページ）での情報さがしの正解数、学生からの感想、それに対する教員からの返事を記入するようになって³⁾いる。正解数とは、例えば図表1の10月5日の授業ではエビアン社のホームページに関して25問のかっこ抜き問題が提示されたのだが、この学生はそのうちの24問に正解したということを表している。表の下方には、自分の学習の進歩が毎回一目でわかるように、正解の答の数を折れ線で表したグラフも添えられている。このグラフは、毎回の授業でセルに数字を書き込むと、その数値が自動的にグラフに反映されるようになっている。

図表1において、学生と教員とでやりとりしたメッセージは削除されているが、実はその内容は多岐にわたっている。以下にいくつかを紹介する。

11月9日（教材はルモンド紙のHP、フランスでの暴動について）：夜間外出禁止なんて本当に厳戒体制だと思います。治安悪化が人種差別の結果なら、これを機にそれの是正が実行されていけばいいのですが。

11月30日（教材はモナコ政府の公式HP）：モナコは、華やかでとても注目を集めるだけに、マネーロンダリングなどもまるで映画の世界のように許容されそうに思います。が！、2000年以降しっかり（？）取り締まっているとのこと、しっかり国も運営されているようで良かったです。いつかは訪れてみたい感じもします。（笑）

12月7日（教材はペリゴール産トリュフのHP）：トリュフ、是非食べてみたいです。記憶の限りでは、食べたことはないように思いますので。笑 トリュフといえば、チョコレートの方がファミリーアーです。（>_<）チョコレートトリュフの語源を初めて知りました。

このようなコメントが教員に送られたことで、この学習者がその日の教材の内容を受動的に受け入れたのではなく、自分からもそれに働きかけて評価を下したのだというこ

とがわかる。つまり、教材のホームページに関して批判的リーディングを行っていたと解釈できる。コメントには11月9日や11月30日のような真剣なものもあれば、12月7日のような軽い調子のももあるが、それは構わないと考えている。チョコレートトリュフの語源がきのこであり、ホームページで知った希少価値のあるきのこに強い興味を抱いたということは、学習意欲の向上にとって大切な事実である。従って、学生からのコメント欄には何を書いてもよいということにしてある。

こうして学習者が最後にエクセルへの記入を行い、それをパソコンのレポート提出機能を使って教員に提出し、授業が終了となる。

4 学習履歴のデータ

4.1 データ収集法

3.5章で述べたように、学生と教員間ではエクセル文書のやりとりが毎回行われている。3.5章の図表1をもう一度ご覧いただきたい。「HP情報さがし正解数」の欄に、毎週学生は自分が得た正解の数を記入していく。この正解数は、成績に一切反映させず、自分の進歩を自覚するためにつける記録であることを周知してあるので、信頼性の高い数値である。ホームページを教材とした授業は、ここ数年間、毎年複数のクラスで行っているため、この数値をデータとして蓄積することができた⁴⁾。

4.2 クラスの情報

まず、今回データを開示するクラスの情報以下に揭示する。

K大学2003年秋学期のクラス

レベル：それまで週4コマのインテンシブコースを受講していた学生

授業に最後まで参加した学生数：10人

授業時間：90分

クイズとHPの他に毎回の授業で扱った教材：ニュースのききとり・新聞記事読解

D大学2004年通年のクラス

レベル：フランス語学科の3年生と4年生

授業に最後まで参加した学生数：8人

授業時間：90分

クイズとHPの他に毎回の授業で扱った教材：ニュースのききとり・新聞記事読解

フランス語のホームページ閲覧をとりいれた授業

K大学2004年春学期のクラス

レベル：それまで週4コマのインテンシブコースを受講していた学生

授業に最後まで参加した学生数：21人

授業時間：90分

クイズとHPの他に毎回の授業で扱った教材：ニュースのききとり・新聞記事読解

K大学2004年秋学期前半のクラス

レベル：インテンシブコースの受講者（週4コマのうちの1コマ）

授業に最後まで参加した学生数：7人

授業時間：100分

クイズとHPの他に毎回の授業で扱った教材：語彙・ニュースのききとり・新聞記事読解

備考：このクラスは半期をさらに2分割し、その前半での受講

K大学2004年秋学期後半のクラス

レベル：インテンシブコースの受講者（週4コマのうちの1コマ）

授業に最後まで参加した学生数：8人

授業時間：100分

クイズとHPの他に毎回の授業で扱った教材：語彙・ニュースのききとり・新聞記事読解

備考：このクラスは半期をさらに2分割し、その後半での受講

S大学2005年通年のクラス

レベル：一般外国語中級（週2コマのうちの1コマ）

授業に最後まで参加した学生数：5人

授業時間：95分

クイズとHPの他に毎回の授業で扱った教材：文法・新聞記事読解

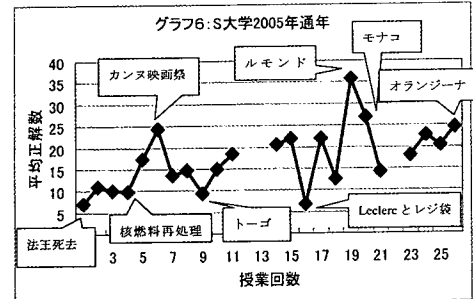
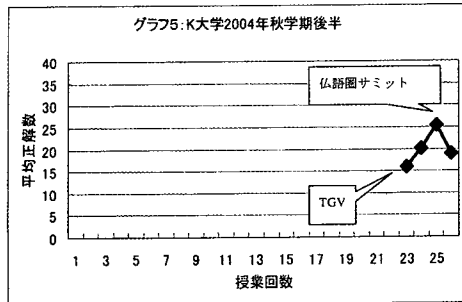
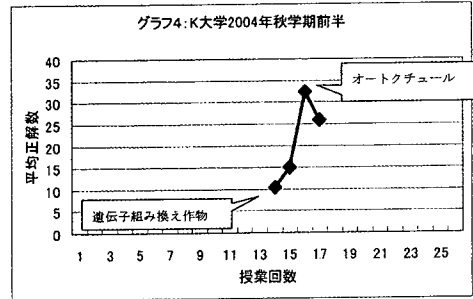
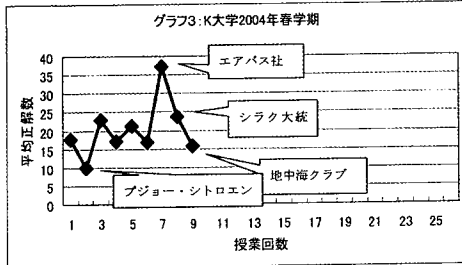
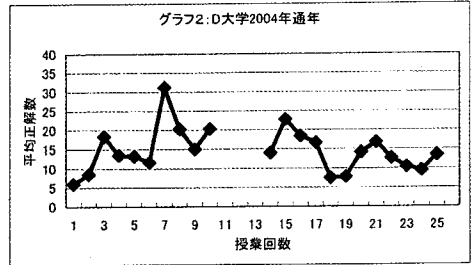
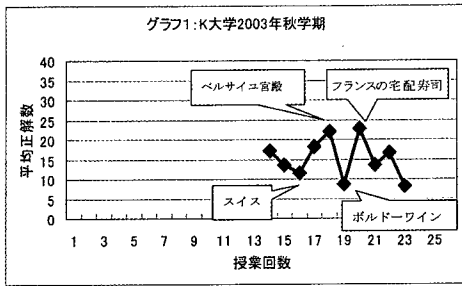
4.3 データ分析

4.2章の6クラスに関し、ホームページの問題の正解数をグラフ表示したのがグラフ1～6である。グラフ1～6は、各クラスの授業参加者の正解数の平均値を表わしている。例えばグラフ1の左端の最初の点は、この日に行われた授業に出席した学生の正解数の平均が約17個であったことを示している。その右隣の点は、次の授業に出席した学生の

正解数の平均が約14個であったことを示している。

6つのグラフを並べての比較を容易にするために、横軸の授業回数を26回に揃えてある。授業25回分の記録を持つ最長のクラス、つまりグラフ6に合わせたために、26回となった。25回でなく26回としたのは、前期と後期を同じ授業数にして表示した方が、通年のグラフの動きを適切に判定できると考えたからである。つまり、前期13回後期13回の授業を行うことを標準として横軸を作成したことになる。例えばグラフ1は秋学期に行われた10回の授業の結果を表しているので、春学期分にあたる授業13回目までは記録がなく、秋学期が開始した時点からグラフが始まっている。また、このクラスは秋学期に10回しか記録を残さなかったため、最後の3回分の授業にはグラフが無い。

縦軸は、6つのグラフすべてにおいて、正解数の最大値を40個としてある。



6つのグラフのすべてが上下に細かく変動しているが、それを均して全体的な動きをつかんでみると、恐らくグラフ1と2が「横ばい状態」、グラフ3～6までが「上昇」であると判断できる。つまり6つのクラスのうち、2つに進歩が見られず、4つに進歩があったと判断することができる。

そこで、なぜ「横ばい状態」と「上昇」の2つに反応が分かれたのかを考えた。4.2章に示したクラスの情報を比較してみたが、グラフ1と2のクラスに共通して他のクラスに無い特徴は、特に見当たらない。この反応の分裂の原因を探るためには、学習者のタイプ分類と、授業で扱ったホームページの内容分類が必要であり、後日の研究課題となっている。今のところ考える唯一の要因は、クラスにあるのではなく、筆者の教師としての資質にあると考えている。つまり、グラフ1と2のクラスの共通点は、筆者がホームページを使った初期の授業を受けていたということである。その頃は、筆者がまだパソコンを使った授業形態に慣れておらず、授業中の不手際も多かったことと思う。言い換えると、教え方の不手際が原因で、クラスが伸びなかったという可能性が高い。

4.4 テーマ別の分析

6つのグラフのすべてで、かなりの上下変動が見られる。上昇基調にあるグラフ3～6も順調な伸びを示すのではなく、ある時は正解数が多いのに次の授業では正解数が減少するという上下動を繰り返している。なぜグラフは上下動を繰り返したのか？この要因としてもっともあり得ると思われたのは、その授業で扱ったテーマである。例えば、食べ物や娯楽を扱ったホームページを教材とした日には正解数が上がり、深刻な話題を扱ったホームページの日には正解数が下がるというような可能性が考えられたので、各グラフの上位と下位のテーマをグラフに吹き出しで表示した⁵⁾。各クラスの授業数が異なるので、それに合わせて吹き出しの数も調整してある。以下に、吹き出しの内容を整理して表示する。

- 上位のテーマ： ベルサイユ宮殿（グラフ1）
フランスの宅配寿司（グラフ1）
エアバス社（グラフ3）
シラク大統領（グラフ3）
オートクチュール（グラフ4）
フランス語圏サミット（グラフ5）
カンヌ映画祭（グラフ6）
ルモンド紙（グラフ6）

モナコ (グラフ6)

オレンジーナ (グラフ6)

下位のテーマ⁶⁾ : スイス (グラフ1)

ボルドーワイン (グラフ1)

プジョー・シトロエン (グラフ3)

地中海クラブ (グラフ3)

遺伝子組み換え作物 (グラフ4)

TGV (グラフ5)

法王死去 (グラフ6)

核燃料再処理工場コジェマ (グラフ6)

トーゴ (グラフ6)

Leclercとレジ袋 (グラフ6)

まず「食品」に注目すると、上位には「寿司」と「オレンジーナ」の2点、下位に「ボルドーワイン」1点がある。「国」に注目すると、上位に「モナコ」の1点、下位には「スイス」と「トーゴ」の2点がある。「乗り物」に注目すると、上位に「エアバス社」の1点、下位に「プジョー・シトロエン」と「TGV」の2点がある。ここまでは、差はないように見受けられる。

「環境問題」に着目すると、上位には無く、下位に「遺伝子組み換え作物」「核燃料再処理工場コジェマ」「Leclercとレジ袋」の3点がある。基準が多少曖昧になるが、「明るく軽め的话题」に注目すると、上位に「ベルサイユ宮殿」「寿司」「オートクチュール」「カンヌ映画」「オレンジーナ」の5点があり、下位には「ボルドーワイン」「地中海クラブ」の2点しかない。

以上の考察をまとめると、明るく軽いテーマのホームページを使うと問題の正解率が上がり、環境問題などの深刻な問題をテーマとしたホームページでは正解率が下がるという可能性を示唆している。ただし、データの数はまだ不足しており、ここではあくまで可能性にとどめておく。

5 結論

まず、ホームページを教材とした授業という実践の場に、応用言語学やペダゴジーの理論をどのように反映させているのかを説明した。具体的には、prereading activityとしてのクイズで内容スキーマの活性化を実現し、document authentiqueとしてフランス

語で作成されたホームページを教材として使い、ホームページの解説ではその形式スキーマに着目した説明をし、批判的リーディングを促すためにエクセルによる学生とのコミュニケーションを行っている。

論文の後半では、ホームページに関する学習の履歴を分析した。その結果、学習者の上達にはホームページを使った授業が上手に行える教員が必要である可能性、そして学習者の正解率を上げるためには明るく軽いテーマのホームページが効果があり、環境問題のホームページは効果が薄いという可能性が示唆された。

今後もホームページを教材とした授業を続け、データの蓄積を重ねて分析の精度を増すことによって、語学教育における実践と理論の橋渡し役としての貢献を目指す所存である。

注

- 1) 小池・他、1997, p.270参照。
- 2) ホームページの文章を丸ごとコピー&ペーストし、仏英辞書で英語に直すことは禁止している。そして、通常授業時にはネット辞書の使用は許可しているが、テスト時にはその使用を禁止している。
- 3) このクラスでは、HP情報さがしの他に読解も行っていたので、読解で読めた行数を記録するセルも用意されている。
- 4) ホームページを教材とするすべての授業でエクセル文書を利用しているわけではない。エクセルによる教員との意見交換を学生が煩雑であると感じるのではないかと判断したクラスや、週2コマを担当するのでエクセルなしでも十分にコミュニケーションがとれると判断したクラスでは、エクセルは使用していない。
- 5) グラフ2のクラスに関しては、テーマの記録が残っていないので、吹き出しはつけられなかった。
- 6) グラフ1の最下位は、最終回の授業である。この授業で扱ったのは「ハリー・ポッター」であり、ハリー・ポッターの公式ホームページに関する問題を行う前に、映画を使ったききとりを通常授業の2倍も行ったため、ホームページ学習に割く時間が少なくなってしまったものと考えられる。そのため、下位のリストからは除外した。

参考文献

- 小池生夫 (1997)、『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』、東京:大修館書店。
白畑知彦、富田祐一、村野井仁、若林茂則 (2002)、『英語教育用語辞典』、東京:大修館書店。
シルバスタイン・サンドラ著、萬戸克憲訳 (1997)、『自立した読み手を作る新しいリーディング指導』、東京:大修館書店。
田崎清忠、佐野富士子 (1995)、『現代英語教授法総覧』、東京:大修館書店。

(本学非常勤講師)